グローバル産業人材育成の力に

九州インターンシップ推進協議会　設立10周年

「九州インターンシップ推進協議会」（会長・有川節夫九州大学学長、事務局・福岡県中小企業経営者協会連合会）が、設立10周年を迎えた。同協議会を通じて年間850人を超える学生が企業や団体、行政機関でインターンシップによる就業体験をし、同協議会は学生の就職率の向上や地元企業への優秀な人材供給などで地域経済の振興に大きな役割を果たしてきた。10周年記念事業として記念式典や講演会、シンポジウム、フォーラムがこのほど開催され、企業と大学、行政機関がさらに連携を深めることを誓った。

盛大に記念事業

記念式典

10周年記念事業には、受け入れ企業や大学、学生ら延べ550人が参加して行われた。有川節夫会長は式典のあいさつで「広域インターンシップの実施に伴う地域連携をいっそう深め、希望する学生がいつでもどこでもインターンシップができるようになることを目指す。10周年を契機に新たなステージに進みたい」と話した。

あいさつする有川会長

また、優良受け入れ企業として、福岡トヨタ自動車（福岡市）、コカ・コーラウエスト（同）、NTT西日本－九州（同）、九州ばどー（同）の5社が表彰された。受賞企業を代表して談福岡支社の金子直幹社長は「学生を受け入れ続けることで、会社の風土も変わってきた。学生に選んでもらえるような企業にならなくてはならない、と社員も思うようになったからだ」とあいさつした。

盛大に開かれた設立10周年記念事業

優良受け入れ先で表彰された企業代表の皆さん

企業と大学が連携

実践的な人材の養成へ

記念講演

「グローバル人材の育成から採用まで」と題して経済産業省九州経済産業局長の滝本徹氏が記念講演した。以下は講演の要旨。

◇

学生にとっては、インターンシップの役割は、健全な職業観を持つ、学習のモチベーションを上げる、社会人としての基礎力を身に付ける、ことが挙げられる。企業にとっても広報などのやり方によっては、大きな効果がある。経営者が真剣に経営や事業について語る機会を設け、それがインターンシップへ、さらには就職へつながるようなシステムを考えてはどうだろうか。大学の教育に産業界のニーズを反映させ、実践的な人材を養成することも大切だ。企業はメリットだけではなく、地域活性化に貢献するという精神を持つことが大事だ。大学もレベルの高い人材の育成に、企業を活用しようという考え方が必要だ。産学連携を強固にしながら、教育をより現実的で産業界のニーズに応えるものとして推進していくことが重要だ。

九州経済産業局では、経済のグローバル化に対応して、留学生のインターンシップを柱とする「グローバル産業人材活用プログラム」を実施している。しかし、大事なことは日本の学生の人材育成だ。今後、地域や企業と一体となって、グローバル人材の育成に向けて具体的な取り組みを進めたいと考えている。

フォーラム

フォーラム「志事（しごと）～夢の実現に向けて」では、パネリストの大倉紀子氏（ジャンヌマリー社長）、下田功氏（アビスパ福岡専務）、中村信喬氏（博多人形師）の3人が、「働くということ」をテーマに約100人の学生らと語り合った。

大倉氏は「学生が社会に出て挫折や失敗をすることは当たり前。理不尽なこともあります。それも受け止めて、より強く生きていってほしい」と学生たちにエールを送った。下田氏は「楽しく働くことが大事ですが、それは楽をするのではなく、自分の力を出し切ることに楽しさがあります。夢を持ち、それを共有できる人を増やしてください」と夢の実現への心構えを話した。中村氏は「人形は生活に必要なものではありませんが人に夢や希望を与えます。誰しも人のために役立つ才能を一つは持っています。それを生かせばいいのです」と働くことの意味を語った。

シンポジウム

「将来の選択。決め手は何だ」と題して行われた記念シンポジウムは、若手経営者である渡辺拓也氏（天晴れ社長）、松永真樹氏（グローブ社長）、青木亮介氏（CostaLink社長）の3氏をゲストに招いて開催した。

渡辺氏は「目の前の選択肢に阻まれて動けなくなっていませんか？　生きることに正解はありません。AでもないBでもない道があります。動けば変わります」と、行動することの大切さを指摘。松永氏は「私が自分のやりたいことを実現できているのは、友達が私のことを認めてくれるからです。自分のこと、人のことを認めることは難しいけど大事なのです」と、友達の大切さについて語った。

また、青木氏は「座右の銘はジャスト・ドゥ・イット（とりあえずやっておけ）です。やっていれば結果は後から付いてきます。わくわくすることが起業につながるのです」と、学生たちに、まずは挑戦してみることを勧めた。

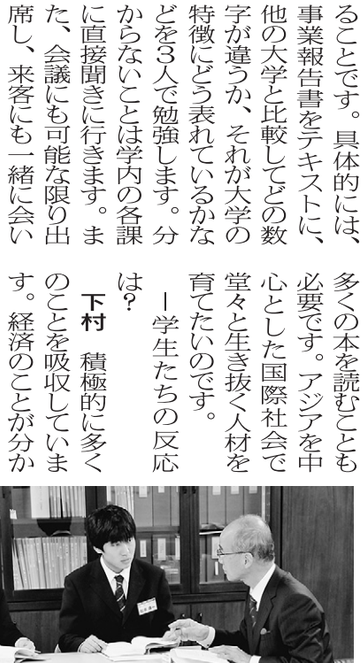
PRのページ

学長自らインターンシップ

学生招き人間力磨く

福岡工業大学学長

下村　輝夫氏



福岡工業大学の下村輝夫学長は、学長室に学生を受け入れる「学長インターンシップ」を行っている。インターンシップで企業トップが直接学生を指導することは、ほとんど例がないが、組織全体、あるいは経済の動きを学べる点では、インターンシップの究極の形といえ、九州インターンシップ推進協議会でも「カバン持ち隊」として本年度推進している。究極のインターンシップを実践している下村学長に、その理由などを聞いた。

―学長インターンシップとは？

下村　夏と春の休みの期間に約2週間、男女1人ずつの学生が私と行動を共にしています。狙いは、大学という組織の中でのヒトとカネとモノの動きを学ばせることです。具体的には、事業報告書をテキストに、他の大学と比較してどの数字が違うか、それが大学の特徴にどう表れているかなどを3人で勉強します。分からないことは学内の各課に直接聞きに行きます。また、会議にも可能な限り出席し、来客にも一緒に会います。

―なぜ学長自ら？

下村　単科大学においては、知識も交流もその分野に偏ってしまう傾向があります。学生たちが人間力を高めるためには、いろんな人と会って、話を聞いて、耳を肥やすことが大事です。多くの本を読むことも必要です。アジアを中心とした国際社会で堂々と生き抜く人材を育てたいのです。

―学生たちの反応は？

下村　積極的に多くのことを吸収しています。経済のことが分かると、日々の株価などのニュースも面白くなり、専門以外の本も読むようになっています。親御さんからは「話すことが変わった」と驚かれ、感謝されています。

学生たちに業務内容などを説明する下村学長